
キセキ巡り

奈月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キセキ巡り

【Nコード】

N5316S

【作者名】

奈月

【あらすじ】

いつの間にか雪の中に佇んでいたヨウは、声をかけてきた車掌姿の男性に連れられ、言われるままに、とある列車に乗りこんでしまう。その列車の中で知らされた真実は彼にとってあまりに残酷なものだった。「自分は既に死んでいて、さらにこの列車は途中下車できない黄泉への片道列車だって？」一方、現世では、恋人を数日前に亡くした瑠奈は、そのショックからあらゆる感情が抜け落ちてしまっていた。「このまま彼の後を追うのもいいかもしれない」そう自棄になる彼女に突如として訪れた”ある転機”とは。友人の由

梨の一言が、瑠奈のその日の運命を一転させた。「どうして死んでしまったの」と泣き崩れる少女と、「俺だって逢えるもんなら、逢いたい」と悲痛に叫ぶ少年。——これはある死に別れた恋人たちが成し遂げた奇跡の物語である。

0章 日常の終わり（前書き）

はじめまして。

なろうさんで小説を投稿するのは初めてになります。

拙い作品ですが、楽しんでくださると幸いです。

0章 日常の終わり

ズガシャーン、と凄まじい轟音がそれまであった朝特有の忙しい日常を切り裂く。

人間と車体の接触した鈍い音と共に、雑踏は静寂に包まれた。

急ハンドルを切った車は、最終的に反対車線の電柱へ衝突し、耳障りな軋んだ音を辺りに響かせる。

数寸後に我に返った女性の甲高い悲鳴を皮切りに、その場は騒然、混乱状態に陥った。

爽やかな朝の訪れは、瞬く間に地獄絵図へと様変わりしたのだ。

「だれか！ 早く救急車を…！」

大破した車の中には、中年の男性が座席にぐったりと倒れ込み、頭から血を流して気を失っている。車の後部座席には、小学生くらいの幼さ残る少女が座席を横切るようにうつ伏せで伏せている。

真つ先に車内を覗き込んだ中年の女は、一時絶句した後、震える声で救助の人員を呼んだ。「だつ誰か…、誰か手を貸してくださいっ！」声を掛けられ歩み寄ったリクルート姿の青年は、青ざめた顔でひしゃげた扉を力ずくでこじ開けようと躍起を起こす。そうすると弾かれたように周囲に寄ってきた者達が、手を取り合い、彼ら親娘を車外へと運び出す算段となる。

もう一カ所、見物人が集まっていたのは、その車と接触した年若い青年が横たわる場所だった。青年は、車と衝突した瞬間に遠くに吹き飛ばされ、十字路の横断歩道の真ん中あたりに今も無惨に横たわっていた。

初めに青年の近くまで寄ったのは、ビール腹の壮年の男だった。慌てて駆け寄った彼は、青年を一見して、「こりゃあ、酷い…」とその表情を歪めた。男の後ろから付いてきていたスーツ姿の女性も

口元に手を押し当て、思わずといった様子で顔を背ける。

——青年はほぼ即死の状態だった。すでに致死量の血が道路へと流れ出し、外傷もひどかった。ぱつと見ただけでも、腕が反対の方向へと折れ曲がり、顔半分が潰れていた。開かれたままの虚ろな片目も虚空のみを見つめ、そこにはもう精気は伺えなかった。

青年の傍らにしゃがみ込んだ女性が、目を伏せ、彼の目元にそつと手を添えた。女性は開かれたままだった彼の瞼を閉じさせ、何とも言えない悲壮感に暮れた。女性の後ろでそれを見つめていたビール腹の壮年男は、悲惨な状態ながらも何とか認識できた彼の制服へと目を移す。そして彼の胸元に血塗られた校章を見つけ、視線を十字路のすぐ先にある学舎へと流した。

「——この子は…第三高校の生徒のようすな……」

「ええ、まだ若いのに……」

男に倣って、しばらく第三高校の方向を見つめていた女性は、ふと青年の周りに散らばった鞆や教科書を掻き集め始めた。遺族には必要なものになるだろう。筆箱、教科書、タオルと、あちこちに散らばった遺品には、どれもべつとりと血が付着していた。一通り掻き集めて、ほつと息を吐いた女性は、鞆の中のを順に眺める。男子高校生の持ち物としてはこのくらいだろうか、と考え、そこで彼女はあつたものが欠けていることに気付く。

「ん？ どうしました？」

キョロキョロと周辺を見回す女性に、男が尋ねた。それに対し、辺りを簡単に探しまわった女性は「いえ、ただ……」と小さく紡ぎ、口籠った。そうして、再び鞆の中に目を落としてから、男性を見て、ぽつりと呟いた。

「携帯電話がないんですよ……。高校生なら、大体みんな持ち歩いているのに……」

0章 日常の終わり（後書き）

ちよつと思つところがあつて、改稿しました。

1章 雪と車掌とさびれた駅（前書き）

ヨウ視点。

1章 雪と車掌とさびれた駅

ずっと、雪が降り続けていた。

関東圏では滅多に降らないくらいの積雪量。それは現実と非現実をヨウに区別させるには、うってつけのものだった。雑踏の中を行き交う人々は、この尋常でない大雪も交差点の真ん中で突っ立っているヨウも、まるで存在していないものかのように通り過ぎていく。ヨウだけならまだしも、これだけの雪に誰も目を向けないのはおかしいことだった。

大体どうして自分はここにいるのだろう。今日は平日で、普通なら学校のはず。現に自分はこうして制服も着ている。ヨウは自身の制服を見下ろし、そしてハッと我に返った。慌てて学校のある方を振り返る。ちよつと待てよ、俺。

「今、何時なんだ……？」自分が学校に行く時間に、この交差点はこんな混雑していない。混雑する時間は決まっている。学生と社会人の通学・通勤ラッシュがちょうど重なる、午前九時前と午後六時前後だ。ヨウは部活の関係でどちらの時間もここを通ることがない。つまりだ、導き出される結論は一つ。

「部活！ やばい、遅刻だっ！」

ヨウは肩に引っ掛けていた鞆を抱え直し、学校への道を一目散に駆け出そうとした。それと同時に、遅れる旨を部長に一報しようと鞆の中から端末を取り出す。しかし画面を見て、ヨウは目を顰めた。「画面が真っ暗……？」誤って電源を落としてしまったのかと、ヨウは首を傾げながらも電源ボタンを長押しする。そうして一、二、三秒と待って——それでも端末からの反応はなかった。

「充電……は忘れてないし、もしかして壊れたのか？」

もう一度電源ボタンを押して反応がないことを見て取り、ヨウは

溜息をついて、部長への連絡を諦めた。「行つて謝るしかない、かしょうがない、他に連絡の仕様が無いのだから。そうと決まれば、電源が入らない機器にかまけている場合ではない。鞆の中に携帯を放り入れ、これからの全速疾走に備え、大きく息を吸う。その時だった。

「貴方の向かう場所は其方でありませんよ、ヨウ君」後ろからそんな声が掛かったのだ。

突然名指しされたことを驚き、振り返つて声のした方に目をやると、そこにいたのは車掌姿の若い男性だった。二十代半ばくらいの優しい雰囲気を持つその男性は、ヨウと視線を交えると涼やかに笑った。ヨウはそんな彼に不思議と、不信感といった負のイメージを持たなかった。そう、初対面で名前を知られていたにも関わらずに、だ。後から考えれば、これほど可笑しい話はないのだが。

「そつち、じゃない……？ 学校、こつちだからちゃんと合つてますよ？」

ヨウはこれから自分の向かうべき道を指で指し示してみせた。だが、車掌姿の彼はヨウの指した道を一瞥した後、ゆっくりとその首を横に振る。

「いいえ、貴方はこれから此方に向かわなければならぬのですよ」そう言つて彼が指し示したのは、ヨウが向かおうとしていた方と全く間逆の方向だった。正直、ヨウは面食らった。「此方に行かなければならないって」

なんでそんなことを初対面の彼に命じられなくてはならないのだ。そうは思つたものの、とりあえず大人しく男性の手に従つて、彼の背後に目を移す、と。

——その次の瞬間には、もう其処は先程までの場所ではなくなつていた。

「駅……？」

気付けば、ヨウは駅のプラットホームに立っていたのだ。突如変わった周りの風景に、ヨウは首を竦ませてグルリと駅構内を見回す。そこは数人の乗客と一つの黒い鉄の塊があるだけの、少し寂れた駅だった。鉄の塊に備え付けられている窓からは、老若男女さまざまの人が座席につき、出発を待っている様が見える。ヨウが茫然とその様を眺めていると、鉄の塊――蒸気機関車の煙突がボワツと蒸気が吹き出す。それと同時にポーッと汽笛が鳴り響き、ホームに居た者たちは慌てて機関車の入り口をくぐっていく。出発の合図がなされたのだらう。

「さあ、貴方もご乗車ください」

と、それまでヨウの後ろで黙っていた彼が、ヨウの背中をグイッと押した。そのまま乗車口まで強引に押されて、列車に押し上げられそうになる。そこでようやくヨウは「え、ちょ、待って下さ……っ！」と抵抗の声を上げた。その場で足をつ立てて踏ん張り、自分の後ろの車掌姿の男性の方を勢いよく振り向く。

「ちょ、乗れって言われても、俺、切符買ってないし、改札も通ってないんですけどっ」

「切符は必要ありません」ヨウの抵抗をやけにきつぱりとした口調で彼は切り捨てた。思わぬバツサリ否定にヨウは一瞬二の句が継げなくなる。そうすると相乗効果で突っ立てていた足の力も抜けた。その隙を突いて、車掌姿の彼がヨウの背中を強く押し、素早く列車の中に押し込む。前のめりになって転びそうになったヨウを支えてくれた車掌姿の彼も、いつの間にかヨウと一緒に列車に乗り込んでいて。「ちょ、何すんですかつ」

車掌姿の男性の暴挙にヨウが眉尻を上げると、彼は申し訳なさそうに苦笑した。そして怒るヨウを宥めるでもなく、「大丈夫ですよ」とそれだけ告げる。

「は、何がですか？」怪訝にヨウが目を顰めた。すると彼はふっと柔らかく笑んで。

「ご乗車になるための運賃等はすでにいただいておりますので」

そこで一呼吸置いた彼は、未だ訝しげに自身を見るヨウと視線を合わせた。カチリと視線が合ったことで、ヨウの心は一瞬怯んだ。するとまるで図ったかのようなタイミングで、爆弾は落とされたのだ。

「……乗車運賃は貴方の人生ですから」

ヨウは目を見開き啞然として息を呑んだ。強制的に黙らせられたヨウに、彼は再びふんわりと柔らかく微笑みかける。やがて「席に案内しますね」という言葉で、車掌姿の彼はヨウに背を向け車両の中へと足を進めていった。視線を外されたその瞬間、ヨウは会ったばかりの彼に不信感を抱けなかった数分前の自分を、無性に叱責しなくなった。

2章 壊れた世界で、ひとり少女は（前書き）

瑠奈視点。

2章 壊れた世界で、ひとり少女は

カーテンの間から朝日が覗いている。窓の外では小鳥がいつもの様に朝の訪れを喜びさえずっている。そう認識すると同時に、瑠奈の意識は急激に上昇した。まだ眠っていたいと眠気にしがみ付き、意識の浮上を拒む自身の心。しかし昨夜自分でセットした携帯のアラームが、早く起きるとばかりに、電子音を引つ切り無しに掻き鳴らし、瑠奈を急かす。クリアボタンをねじ込むようにして押して、小煩いアラームを止め、瑠奈は気怠げにベッドから身を起こした。

「……もう朝」眩い光に目を細めて、瑠奈が小さくぼやいた。夢を見ていた。ずっと目覚めたくない和願いたくなるような、そんな幸せで物悲しい、かつての日常、その光景を。それは今や、己の夢でしか触れることの叶わないものでしかない。

（——ああ、馬鹿だな、私）

なんだか可笑しくなつて、瑠奈は嘲笑を浮かべた。と、その時、頬筋が動いたことで頬に残る生温かくて湿った感触をダイレクトに感じ取ってしまった。その気持ち悪さと奇妙さに眉を寄せて、瑠奈は右手で右頬を押さえた。頬に触れた指先には透明な液体が光っている。それを見、瑠奈は他人事のような無感情さで「……濡れてる」とぼつりと呟いた。その液体は意識のない時に瑠奈が零した悲しみの跡だった。

「もう枯れたと思っていたのになあ……」

まだこんなものが自分の眼から溢れ出て来ることに驚き呆れた。自分の感情なんて、三日前に麻痺してしまったと思っていたのだ。――否、麻痺はしているのかもしれない。その証拠に瑠奈の瞳は、意識のある時にもう涙一滴さえ浮かべることがないのだから。

瑠奈はジメジメした己の目元を服の袖で乱暴に擦って、「馬鹿だなあ」と震える声を漏らす。そして口唇を笑顔の形に引き結んで、掠

れた声で微かに笑った。

今日は平日。つまり登校日である。望んで学校に行く気になどなれないが、もし欠席などしたら、少なくとも母は良い顔しないだろう。もしかしたら友達の出梨も、自主早退して自宅に押し掛けてくるかもしれない。由梨がそういう人間だと、瑠奈は高校での二年弱の付き合いでよくよく把握できてしまっていた。そんな二つの懸念から、浮かぬ心ではあったが、ノロノロと学校へ行くための支度を済ませていく。

やがて支度を終えた瑠奈は階段を下り台所に入る。時計は七時半を回ったところだった。

娘が台所に姿を見せたことをその気配で感じ取った敦子は、キツチン向かったまま、「おはよう瑠奈」と言葉を背後の瑠奈に投げかけた。

「今日、学校でしょ。早くごはん食べちゃいなさい？」敦子のその台詞の後には、相変わらずトントんと単調な包丁の音が奏でられていた。瑠奈は背を向けたままの自身の母を一瞥し、一言「いらない」とだけ告げ、冷蔵庫の扉を開けた。その中に常備されている麦茶の入った容器を引っ掴んで、そのまま口をつける。後ろでそれをうるさく言う敦子の言葉も聞かぬまま、瑠奈は容器をそのまま冷蔵庫の中に押し込み、階段を駆け上がって自室に飛び込んだ。

そうして勢いよくコートとスクールカバンを引っ掴み、倒されたままの写真立ての隣に置かれたネックレスを慣れた様子でつけ、自室を後にする。音を立てて階段を下りてきた瑠奈を待ち構えるようにして立っていた敦子が、また何事かを口煩く言ってきた。が、瑠奈にはその小言を聞くだけの余裕は、もう持ち合わせていなかった。

結局、瑠奈は敦子と目も合わせることなく、玄関の前まで足早に進んだ。そして――「行ってきます」

そんな淡々とした態度で玄関を出ていった瑠奈。そんな彼女の後姿を、母である敦子はただただ痛い表情で見つめていた。

* * *

冬の朝は寒い。人より少し手が冷たい瑠奈は悴む両手に息を吹きかけた。吐き出された息は、空気に触れた瞬間に白く染まり、指の隙間から上へと昇っていく。それを恨めしい気持ちで眺めた後、瑠奈は失意に目を伏せて学校へと道を急いだ。

登校途中の大通りで信号に引つ掛かり青になるのを待っている時に、偶然目に入ってしまったのは、道の脇に置かれた、白い花。人の波に吞まれて一度掻き消えたその姿は、やがて瑠奈の目前に現われる。雑踏と不釣り合いなくらいの抜けるような白さを保つそれを見て、瑠奈は唇を噛み締め俯いた。ふいに鼻の奥をツンツと何かが霞める。瑠奈は慌てて瞼を閉じたが、自分がもう泣けないことを思い出して、やがてゆっくりと目を開いた。案の定、目尻はカラカラに乾いていた。

暗い気持ちのまま、通学路を進み、学校には辿り着いた。しかし、人と面と向かって話す気分ではなかった瑠奈は、自身のクラスである二年五組の教室に早足で向かった。ガラリと教室のドアを開くと、教室内で談笑していた幾人かの女子生徒と目が合う。それでも瑠奈に「おはよう」と声を掛けてくる者はいなかったし、瑠奈も自分から挨拶をしに行くことはなかった。彼女たちの間では、それが数日前から当然のことと化していたのだ。

ドアから自分の机まで一直線に進み、鞆を机の横に掛け、その身体を机へとうつ伏せた。そしてそのままHR開始までの時間をつぶ

すことに当てるのだった。

やがて瑠奈の登校時にはまだ疎らだったクラスメートたちが、何人かの固まりとなって教室のドアをくぐってくる。瑠奈は時と共にざわつきが増す教室の様子を一切遮断した。こうやって自分の世界に閉じこもっているうちは誰も瑠奈に話しかける者はいない。それも全て承知の上での行動だった。今の瑠奈にいつものクラスの日常を許容できるほどのキャパシティの余量はなかった。――あまりにやる瀬なかったのだ。クラスの中の誰が居なくなっても、世界はきつと問題なく回っていく。そしていつもの日常はいつの間にか元の形でそこに存在する。現状を受け入れられない瑠奈だけを置き去りにして。――時とは無情だ。空虚となった心で瑠奈はそう漏らした。

やがて「HRは始めるぞー。席につけよー」との声と共に、ガラリと音を立てて開いたドアから担任の顔が覗いた。それを合図に散り散りになっていた生徒達が各々の席についていく。すると一つだけポツカリと生じる不自然な空席に、瑠奈の胸は細紐で締めつけられるように軋んだ。その息苦しさに瑠奈は僅かに眉をひそめた。

教卓の前に立った担任はいつもどおりの気だるげな様子で手にしていた名簿帳を開く。それに目を落したまま、出欠席の確認は開始される。これももう、日常のこと。

「あー、有本」名簿番号一番のクラス委員長から出欠確認は始まり、呼ばれた生徒も担任同様ダルそうに「はあい」とどこか間の抜けた返事をしていく。その間も担任が名簿帳から目を上げることはない。担任と生徒の双方が緊張していた入学当初とは打って変わってしまった、なおざりな出欠確認。それは時の移ろいに敏感になる前だったら瑠奈自身も、さして気にも留めなかったことで。そう考えると、悪寒がゾワリと身体を伝う。瑠奈は小さく身震いした。「次、岩瀬」いつの間にか名簿番号はお調子者の伊藤を過ぎ、三番手の大人しい文学少女へと移っていた。

出欠確認はいつもどおり滞りなく進んでいく。

「長瀬」名簿番号の中で丁度中間に位置する瑠奈の名字が呼ばれた時、突如として彼女に大きな衝撃が襲い来た。ビクリと肩が竦んだ。「……はい」と、なんとか喉から絞り出した返事は存外に強張った声音だった。それを不審に感じた担任が、そこで初めて名簿から顔を上げる。だが、歪んだ顔で担任から目を逸らした瑠奈に、担任が追及の手を伸ばしてやることはなかった。まるで、物分かりのいい教師を演じる自分に酔いしれ、悦に入っているかのようだ。そう感じてしまう自分の精神は、やはり相当荒んでいるのかもしれないと、瑠奈は自嘲し苦く笑った。

出欠確認が進むごとに、瑠奈を襲った衝撃は彼女の胸をさらに容赦ない力で締め上げる。その度に心臓が悲鳴を上げ、早鐘のように脈打ち続けた。彼女の脳内に浮かぶ一抹の不安。それは彼女の精神状態を易々と崩していくのだ。

（……もしも、この出欠確認で彼の名前が呼ばれなかったら、遥はもう過去の人ってこと……？）

突如、瑠奈は身体を強張らせて、息を詰めた。思い至ってしまったのは、瑠奈にとって余りにも残酷な真実だった。ここ数日、彼の名前が出欠確認で呼ばれたか否かは、瑠奈の記憶に残っていなかった。そんなことを気にしている余裕など、彼女にはなかったのだ。瑠奈の心は三日前から機能不全に陥っている。しかしそれは瑠奈の都合であって、その他クラスメート・担任の都合とは関係ない。クラスメートたちは、彼がいなくなった当初は往々に嘆き悲しんでいたが、徐々に立ち直って、いつも通りの生活へと戻っていつている。彼とどんなに親しかった人でも、それは言えることなのだ。忘却とは、辛さ・侘しさから逃れられる手っ取り早い手段なのだから。そうやって大切な人を失った痛みは過去のものへと変わっていく。真に無情なのは、時ではなく、人の心なのだ。と瑠奈は既に理解できてしまっていた。

「……っ！」ふいに鋭い緊張が瑠奈に走った。同時にグルグルと頭の中をかき回されるような感覚に襲われ、吐き気をもよおす。し

かしそうなくても、瑠奈は気丈を装い、順に生徒の名を呼ぶ担任の
声に全神経を傾けていたのだ。

はたして、その間是一分だったかもしれないし、十分だったかも
しれない。どちらにせよ、とにかく彼の名が呼ばれる瞬間は、^{そのとき}満を
持してやってきたのだ。

「六合」目当ての名簿番号の一つ前である、彼の幼馴染だった青年
の名が呼ばれる。生憎、担任の声を拾うことに集中していた瑠奈の
耳には、彼の返事は入ってこなかった。だが、担任が顔を上げなか
ったということは出席しているのだろう。担任がペンを一書き分だ
け動かして、両眼の視線を微かに下に流す。そうして彼が、一瞬言
葉に詰まったのが見て取れた。凍りついた瞳の奥で一巡してから、
担任は意を決し、口を開く。「……次、渡部」

担任から紡がれた名を聞いた瞬間、それまでドクドクと忙しない
ぐらいに脈打っていた拳は強い虚無感と共に緩められた。無意識
に握りしめていた拳は強い虚無感と共に緩められた。

担任が出欠確認のために呼んだ名前の中には彼の名前はなかった。

彼——若林遥の名前は、なかったのだ。

そのまま出欠確認は恙無く終わり、担任は必要事項だけを述べ、
HRを閉じた。担任が教室から出ていくと、教室内はまた元の喧騒
を取り戻す。

いそいそと一限目の数学の授業を準備する者、昨日のバラエティ
番組の内容を面白おかしく友達に話す者。さまざまな話題が教室内
を飛び交っている。そんな中、瑠奈はそのどれにも属さず、再び机
に突っ伏した。

話題に混ざるのが億劫で、他人の顔色を窺うのが億劫で、仕舞い
には友達の話に相槌を打つのさえ億劫だった。色彩^{かれ}を失ったモノク
ロの教室に瑠奈の関心は向かない。

遥の存在はこの教室の日常から消えてしまった。だったら私もこ
のまま消え去ってしまってもいいかもしれない。自棄気味にそう思

ったところで、現実に戻すように肩を叩かれた。

伏せていた顔をゆつくりと起こし振り返ると、そこにいたのは予想通りの人物で。

「――由梨ちゃん……」

「…アンタ大丈夫なの？ 顔、真っ青よ？」

心配そうに瑠奈の顔を覗き込んでくる友人をこれ以上心配させないように、瑠奈は無理やり作った笑みを顔に貼りつけ、「…大丈夫だよ」と取り繕って言う。しかし由梨の顔は途端に怒ったように歪み、「強がなくていいわ、バカ」と瑠奈を低い声で叱る。

叱られて一気に情けない顔になった瑠奈の両頬をギュツと横に引っ張った彼女は、

「……悪いけど、アンタの大丈夫をあんまり信用してないのよね、わたし」

とニヤリと意地悪く笑ってみせる。呆けた瑠奈の前に、今度は柔らかに微笑んだ由梨は、瑠奈の頭をポンポンと二・三回優しく叩いた。その行為がなんだか遙を思い出すようで瑠奈の涙腺が途端に緩んだ。由梨はそんな瑠奈の様子に苦笑し、「――行こ」と瑠奈の右手を掴み上げた。

そして授業開始間際の教室から瑠奈を連れ出したのだった。

3章 乗りあわせた3人（前書き）

ヨウ視点。

3章 乗りあわせた3人

列車に無理やり押し込まれた形で乗車を余儀なくされたヨウは、半分訝しみながらも車掌姿の彼の後に続き、車両内を進んでいた。カタンカタンと線路を走るこの古びた列車の行先がどこなのか、ヨウは未だ知らない。が、あまり良い予感がしないことだけは確かだった。

「こちらですね」ややあつてヨウが案内されたのは一つの四人掛けの座席だった。

その席には、すでに窓側に向かい合う形で中年の男性と比較的若めの女性が座っていた。ヨウに気付いたその男性と女性は、まるで「どうぞ？」とでも言いたげな笑みを浮かべる。また、ここに案内してきた車掌姿の彼も後ろに控える形で、着席を促している。

どうやら自分に拒否権はないようだと言ったヨウは、大人しく男性の隣に腰かけた。

「おう、坊主。若いのに、もうこの列車に乗るのか？」

隣の中年の男性が面白そうにヨウに尋ねた。前に座る女性も同意を示すように頷いていた。

「あの……この列車って……？」ヨウは訝しげに男性に訊き返す。

「なんだ、お前、知らないで乗ったのか？ 諏訪さんに説明されなかったのかよ」

男性が首を傾げて、車掌姿の彼を見やった。いや、説明も何も無理やり押し込まれたんだし、と心中で突っ込んだヨウも、車掌姿の彼に恨めしい視線を投げかける。それを受けても、彼——諏訪というらしい——は、その場に澄ました顔で控えていた。どうやら返事は得られなさそうだと理解した男性は、肩を竦めてヨウに視線を戻す。ヨウも諏訪から目を逸らし、気を取り直して、先程からずっと気になっていたことを男性に問いかけてみることにした。

「あの、この列車はどこへ向かってるんですか？」

出来れば途中で降りたいんですけど、と小さくぼやいたヨウに、男性と女性は目を大きく瞬いた。「ああ、そりゃ、無理だな」それに対する返答はいやに早く。

「は、なんですか？」思わぬ不可能宣言にヨウが噛みつく、男性はあっけらかんと答えた。

「なんでって、この列車は黄泉へ直通だから。途中で降りることなんてできねえよ」

一瞬、ヨウは言葉に詰まった。今、なんて言われた？ 黄泉、だって？ それって、もしかなくても「あの世」のことじゃないか。告げられた内容に困惑しきったヨウの様子を見るに見かねて、前方に座る女性が「つまりね」と男性の話を引き継ぐ。

「この列車はね、もう亡くなってしまった人達が黄泉——あの世に行くために乗るものなのよ。だからこれに乗ってる私も、貴方も、ユウジさんも、もう死んでしまったってことなの」

なんだか空恐ろしいことを聞いた気がする。死んでしまったって、俺は一体いつ死んだのだ。混乱した頭で考えても答えは見いだせず、ヨウは答えを求めるように、目の前の女性とユウジという男性の顔を交互に見比べる。だが、二人ともやんわりと微笑むだけで、答えはおろか、焦燥の色さえ覗えなかった。

「貴方が亡くなったのは私と会った場所ですよ。亡くなったのは一昨日の早朝のようですね」

結局、答えをくれたのは後ろで控えていた諏訪だった。その柔らかい口調と笑顔に、ヨウはだんだんと冷静さを取り戻していく。

そして唐突に思い出した、一昨日の早朝の惨劇。そうだ。俺は一昨日の朝、信号待ちしていた時に、猛スピードで飛び込んだできた車に轢かれたんだ。現に、その時の急ブレーキの軋んだ音が耳の奥に焼き付いて残っている。なんだ、俺はあの時に死んじゃったのか。

驚くよりも脱力感の方が先にヨウを襲い、ドサリと座席のシート

に背中を投げ出し、頂垂れた。そうして深く溜息を吐いて瞑目する。と、そんなヨウの頭をユウジがクシヤリと撫でた。

「お前はまだ知ったばかりだから辛いよなあ……」

無骨な手が不器用にヨウを慰める。すると徐々に、ヨウの心にじんわりとした、何とも言えぬ悲しさと寂しさが沁み入った。顔をあげると、目の前の女性も悲しげな笑顔を浮かべて、ヨウの手を優しく取ってくれた。

「私達は彼に説明されて、自分で納得してから乗ったから……。でも貴方はその暇さえなかったのね」

女性が諏訪を見ながら苦笑気味に言う。静かに目を伏せる諏訪と視線は合わない。対するヨウは、彼女の言動から、新たな境地へ達した。自分の今の状況と、自身らのこれから。ヨウは『自身らは既に死んだのだ』と自覚し、認めざるを得なかったのだ。もう受け止めているといっても、彼らも自分と同じく、もう死んでしまった人たちののだ。自分にもあるように、彼らにだって遣り切れない想いはあるはずで。

そう考えるとまだ救われる気がした。悲しみを分かち合うことのできる人間が、自分の他にあと二人もいるのだから。——そう思わないと、足元から崩れ落ちていきそうで。

「大丈夫、です。……お互い様ですから」

悲しみの色が混ざった苦笑を浮かべて、ヨウはそう告げた。ユウジと目の前の女性は少し驚いた顔を見せたあと、同じように苦笑してみせた。「強いわね、貴方は」儂い微笑みを見せた女性に、ヨウは今の自分が出来る精一杯の笑顔をつくった。

「いえ、強いわけじゃないんですよ」

そう。ヨウは取り留めて精神的に強いわけではなかった。いわば、ハツタリとその場限りの虚勢。おそらく独りだったならば、泣き叫んで列車の窓から飛び降りていただろう。危うく二回も死んだ変人という称号を得るところだった。と、そこで自身の思考が、見当違いな方向へ向かっていることに気付き、ヨウは深く溜息を吐いた。

（あんまり悲壮感が表に出ないのは、この二人のおかげ、と言っているのかな…？）

但し、それがヨウにとって、良いことなのか、悪いことなのか、それは判断に窮するところだ。もっとも今のヨウにとって、良いことがあるかは定かではないが。…これ以上考えたところで栓もないことだ。

ヨウは自身の横に無造作に置いてあった自身の学生鞆を手を取った。そうして中途半端に開いていたチャックを素早く閉めると、そのまま椅子の端の方へ放った。

4章 親友からの助言（前書き）

瑠奈視点。

4章 親友からの助言

授業開始間際の教室から由梨に連れられて、瑠奈が向かったのは、学校の屋上だった。通常は閉ざされている屋上へと続く扉を勢いよく由梨が開ける。「ねえ、なんで屋上の鍵……」やや強引な由梨に手を引かれながら、瑠奈は怖々と屋上へ足を踏み入れた。

ヒヤリとした冬の冷気が首筋やスカートの裾から覗く足を撫でる。その冷たさに瑠奈は僅かに首を竦めた。ボタンと扉を締め、さらに鍵まで閉めた由梨は、くにいと悪戯な笑みを浮かべて、「六合から預かった」とあけっぴろげに言う。

「え、六合君？」

「アイツ、前に職員室から屋上の鍵かつぱらって、合い鍵作ったらしくてさ。んで、ついさつき渡されたのよ」

予想外の名前を出されたことで、呆気にとられてパチパチと瞬く瑠奈に、由梨はふつと柔らかく笑んだ。その温かい笑みに、瑠奈はようやく合点が行く。

彼は、遥の幼馴染で親友だったな、と。

「……ねえ、由梨ちゃん、わたし、」

六合君にも心配かけちゃったのかな、と訊こうとして、止めた。それは余りにも一目瞭然な上、どこか彼らに失礼な質問な気がしたのだ。気が沈んでいるところに、さらに自己嫌悪感が加算され、瑠奈は苦しげに視線を落とした。そんな彼女を、由梨は半ば強引に屋上のフェンスの前まで連れて行く。ビュウウ、と師走の寒風がフェンス越しに彼らに吹き付け、その度にガタガタと身体が震える。それに最初に根をあげたのは、瑠奈を屋上に連れてきた由梨の方だった。

「あー、さっむう！ 凍え死にそう！」由梨が腕を擦りながら叫ぶ。それに「当たり前だと思っんですけど……」と不満を漏らしながら、

瑠奈も熱を得るため身体を擦った。

冬の屋上が寒いのは当然だ。それでも由梨がこの凍える屋上へと瑠奈を誘ったのは、一番人気がないだろうと予想したからだった。さすがに教師たちも、冬に屋上の見回りまでしないだろうという、六合の見解によるものだった。

「ほれ、アンタもとつと座んなさいって」

フェンスを前に腰を下ろし、由梨は傍らのコンクリートの床を叩いて瑠奈をそう促した。瑠奈は寒さに身体を縮こませながら、大人しく由梨の言に従う。

相変わらず吹きさらしの屋上は寒かった。瑠奈は心の内だけで嘆息して、隣の由梨に視線を向けた。由梨は「あー、良い天気だねえ」と空を仰いでいる。いつもなら、やや奔放でマイペースな由梨に、会話を振るのは瑠奈の役目。だが、自分のために変わらない態度で振る舞ってくれる由梨に対し、この落ち込んだ気分では、報いる言葉も態度も思いつかなかった。自然と瑠奈は立てた膝の間に顔を埋めて、さらなる沈み込みを始めていた。

それに慌てたのは由梨で。気分を浮上させるために連れだしたのに、さらに気を滅入らせているのだから当たり前だ。暗雲立ち込める瑠奈に、彼女は「顔をあげなさい、瑠奈」と告げた。

「それ以上、沈みこんだらダメ。立ち直れなくなるでしょ」

「——立ち直るって……」立ち直ることなど出来るのだろうか、と寒々しい心で呟いた。

三日前からどこか虚ろな瞳の瑠奈を見咎め、由梨はジクジクと胸が痛んだ。最愛の人を亡くした瑠奈の心境は、由梨には想像もつかない。どう慰めればいい、とひたすら自問を繰り返すが、肝心の言葉は喉の奥に仕舞われたまま、出て来ない。それでも由梨は唇を噛み締め、親友を引き留めるために言葉あぐねる。

「一昨日・昨日はずっと無反応だし、今日はひたすら沈んでるし……。ねえ、瑠奈。私は、このままアンタが、若林の後を追っちゃいそうで、気が気じゃないわ……」

苦しげに眉を顰め、由梨は力なく首を振った。

「っ、そんなこと……」

しない、と続けることは出来なかった。悲しみの衝動にかられない保証はどこにもない。機会があつて、心積もりが出来れば、自分は恐らく、ヤルだろうから。

言葉に詰まったまま沈黙した瑠奈の心情を察し、由梨は鋭い視線を彼女に浴びせた。自分は決して許さない、と思いを込めて。

ふと、由梨の視線が瑠奈の首筋で止まり。

「それ、つけてきたのね……」

瑠奈は指摘された自身のネックレスをそつと押さえ、目を落としたり。由梨には瑠奈の細い首に括られたそれが、彼女を縛る鎖のように思えた。本来、誓いを表わす指輪が通されたネックレスが、瑠奈を縛る鎖となるなんて、どんな皮肉だろう。眩暈がするようだ、と、由梨は頭を抱えた。

一方、瑠奈はネックレスを押さえ、込み上げる嘆きを必死に抑えていた。しかし、いったん愚図りだした心は、瑠奈のいうことを簡単には聞いてくれない。悲しみがぶわつと一気に押し寄せてきた。考えることは三日前からずっと変わり映えしない。

（どうして遥は死んじやったんだろぅな……）

しかも、あのタイミングで。

遥が事故で死んだ時、瑠奈は彼と喧嘩中だった。いつも瑠奈が怒るとすぐに取り成し怒りを鎮めてくれる遥が、あのときは珍しく引かなくて、初めて一週間ぐらい口を利かなかった。喧嘩の内容はよく覚えていない。瑠奈が、バスケ部で遅くまで練習を行う遥を待つか、待たないか、とかそんな今にして思えば下らない内容だった。それで、気がつけば意地の張り合いで一週間過ぎていた。さすがに一週間遥と口を利かないのに耐えられなくなった瑠奈が、謝ろうとしていた日に、遥は死んだ。そう、結局、瑠奈たちの仲は、喧嘩したまま、死別という最悪の形で終わったのだ。やりなおしは、もうきかない。「……………」瑠奈は悔しさに歯噛みした。

悔むことはまだあった。実は、あの日、瑠奈は遥と仲直りする時を、朝の登校中にしようと決め、その日の朝に「学校まで一緒に行こう」とメールで連絡を入れていた。が、遥からの返信はなく、まだ怒っているのか、と落胆し、独りで高校まで向かったのだ。――

――その最中に遥が事故に遭っているとも知らずに。瑠奈がそれを知った時には、もう全てが終わっていた。お昼休みに、遥のお母さんから連絡をもらって、ようやく知ったのだ。遥が交通事故で死んだ、と。

もし、朝、連絡を入れるのが、もう少し早かったら。そう考えたら、もう駄目だった。だって、そうだろう。遥と連絡が取れていたら、遥は恐らく事故に遭うことはなかったのだから。

後悔ばかりが先立ち、瑠奈を蝕む。顔が真っ青になり、ブルブルと瑠奈の身体が震えた。その震えの理由が、明らかに寒さのせいではないことを察した由梨は、目を見開き、瑠奈を引き戻すために慌てて彼女の肩を掴んだ。

「ちよつと瑠奈……？ アンタ酷い顔色よ……？」

由梨の声で、瑠奈はいつの間にか俯いていた顔を、ノロノロとあげた。目の前には教室で見た、由梨の心配そうな顔があり。瑠奈は取り繕った笑みを顔に浮かべた。

「――だ、だいじょうぶだよ？」

頭を振って、それまでの考えを端に追いやる。考えても仕方がないことだ、と見切りをつけて。だって、遥はもう死んでしまった。もしかしたら、なんて今更考えても遥が帰ってくるわけではない。後の祭り、ってこういうことだね、と瑠奈は自嘲して嗤った。

その投げやりな瑠奈の表情を見て、由梨に緊張が走る。ヤバい、気がした。自暴自棄になった瑠奈がしそうなことを思っ、心臓の鼓動が速さを増す。ドクン、と脈打つことに冷や汗が背筋を伝った。「瑠奈、アンタ今日はもう家に帰って休んだ方がいいわ」

感情を殺した声で由梨が言った。「え……」瑠奈が虚を突かれたように固まる。

「ちゃんと気持ちの整理をつけなさい。そのまま授業受けても、身に入らないだろうし…。言い訳なら私がしといてあげるから。…ね？」

そうしなさい、と由梨は瑠奈に念を押した。確かにこのまま授業に出ても、顔色が悪くなつて授業どころではないだろう、と瑠奈は思った。だが、今は一限目の途中で、このまま帰るとなると、瑠奈は今日HRにしか出ていないことになる。さすがに、それはまずいのではないかという気持ちだが、瑠奈を押し止めていた。

渋る瑠奈を、反論は許さないとばかりに、由梨は真剣な顔で諭す。「いいから、帰りなさい。その顔で教室に戻る方が問題だわ」いいわね、と問いかける由梨。やがて瑠奈はコックリとうなづいた。いつも頼りにしている親友がここまで粘ることだ。従うほか、あるまい。

こうして瑠奈は、一限目で帰宅を余儀なくされたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5316s/>

キセキ巡り

2011年6月23日10時40分発行